特32
562

事情

村井静馬著

明治太平記

五編

上

試

定

雪江關思敬隸

雪江

村井靜馬編輯

鮮齋永瞿畫

官許

明記 全

類聚國史 稗史 卅四 函 貳

東京書林 延壽堂發兌

武

宴

雪江關思敬隷

月台太平已五編上 二

明治十七年六月十七日文部省版

官許

帝國博物館
類屬 國史 稗史
冊 四十二
函 文 武
帝國博物館之印

記 全

村井靜馬編輯

鮮齋永瑯書

東京書林 延壽堂發兌

土方歳三

松岡磐吉
荒井郁之助

駒井正五郎

滝川克太郎

松平太郎

巻之壹

宮古港より碇泊せし官艦七隻の中へ賊艦一艘乗込み来りて烈しく力戦なるより起り官艦松前城を抜き尋で木古内の戦争より終る

巻之貳

大鳥圭介衆に説て全軍を五稜郭近傍より引き揚る支より起り海陸数度の接戦より互ひに勝敗ありつるも官軍遂に函館を恢復するに及ぶに終る

明治太平記五編巻之一

東京　村井静馬編輯

再説回天丸に乗込み来りし脱兵等を洋中に颶風に會ひ辛く風波を乗抜く彼の宮古港に近付たる故俱に函館を出帆せし蟠龍高雄の両艦は何れの方へか吹流されぬ帆影も更に見へ孫ども此港中に敵の軍艦碇泊せしと見受るゝ自餘の二艦の来るをば待合せたきも暇なければ縦ひ我が船一

巻之壹

宮古港より碇泊せし官艦七隻の中へ賊艦一艘乗込み来りて烈しく力戦なるより起り官艦松前城を抜き尋で木古内の戦争より終る

巻之貳

大鳥圭介衆より説て全軍を五稜郭近傍より引揚の支より起り海陸数度の接戦より互ひに勝敗ありつるも官軍遂に函館を恢復あるまで及ぶより終る

明治太平記五編巻之一

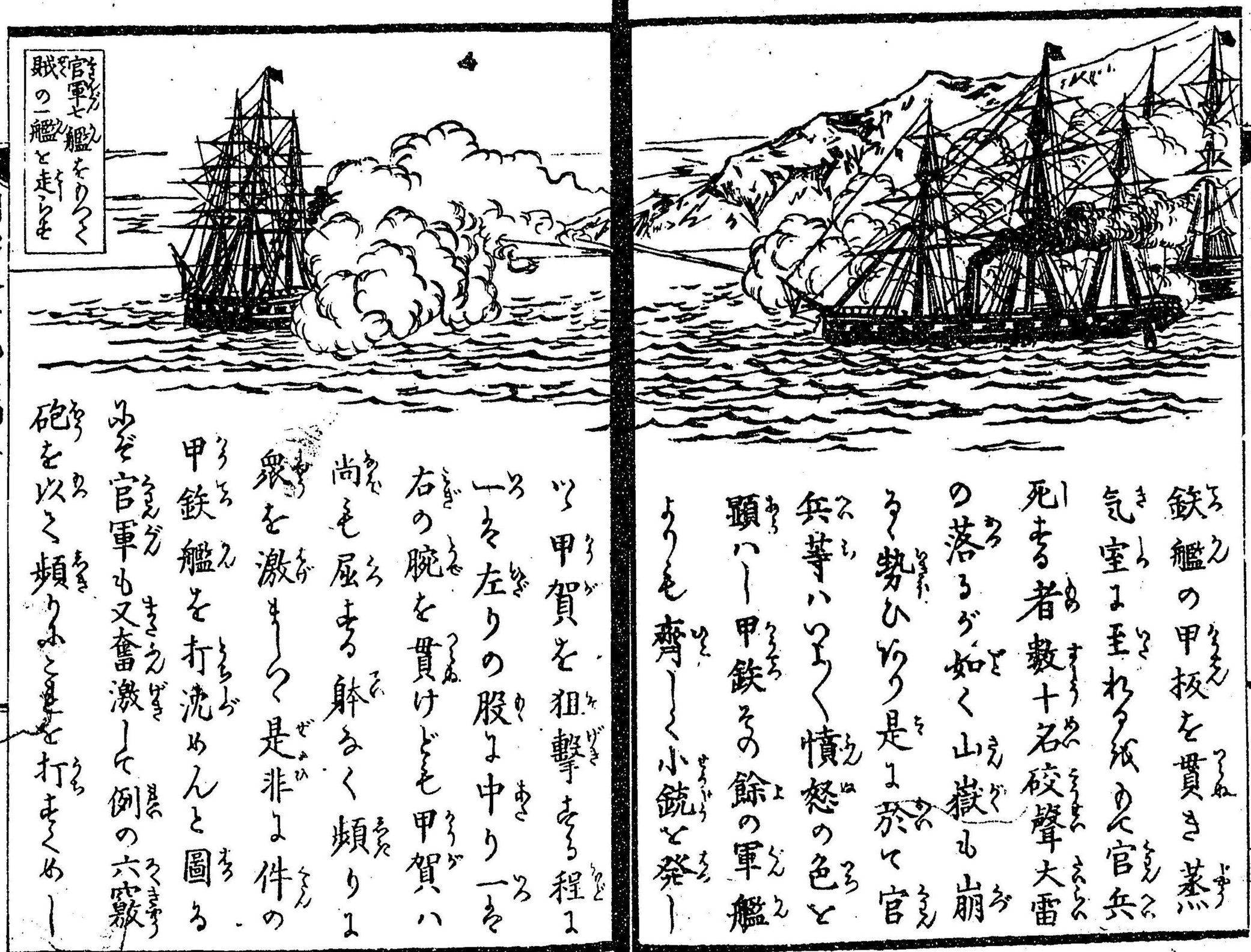
東京　村井静馬編輯

再説回天丸より乗込み来りし脱兵等を洋中にて颶風に會ひ辛く風波を乗拔き彼の宮古港より近付なる故俱に函館を出帆せし蟠龍高雄の両艦ハ何れの方へか吹流されん帆影も更に見へ孫ども此港中に敵の軍艦碇泊するせーと見受るゝ自餘の二艦の来るをば待合まどきに暇なくば縦ひ我が船一

艘に敵の數艘に當るべき豫め方畧を設け不意に起りく事を成さば思ひの侭の働きのちゝばと言ふ支ゆるゝ事と忽ち一策を施ーツ北亞墨利加の五字を書たる旗章を高く引揚て徐々入港あるを程に甲鐵以下の軍艦も實に米艦なりと思ひく意をも留めず居たりしふ回天直ちに甲鐵艦に近寄ると二三歩にして急に日章の旗を揚げ甲鐵艦の船腹を狙ひ大砲數發打掛けしーるど船の全体総くゝる

鉄板をめて張たれば弾丸ハ悉く弾き飛んで海中へ落るのみ一も船板を貫くこと能はず是に於く甲鉄の効勲うゝぬを見るふ足り此時まいゝう諸艦の兵士等始めく賊艦なるを知り共に合旗を揚げつも卒うふ蒸気鑵に火を焚けども士卒等何れも狼狽しく直ちふ船を運転るーー砲を發するとを得ず就中甲鉄の水夫ハ殊に賊艦の砲声に懼れ海に飛入り死まるもあり適甲板の上に出れバ脱兵

矢庭に小銃をのそきを狙撃に及ぶみぞまさに甲板に出る者なし然れども甲鉄艦は其造製堅固なる故脱士等奈何に砲撃まれども又此船を破ぶる能はず須臾猶豫ひ居る程に此時賊軍の中より一人大塚波次郎と名告つ刀を振りて第一番に甲鉄艦に飛乗るべ続いて野村理三郎笹間金八郎等数十人短槍白刃を携へて先を争ひ乗込み来りしに大いに敵を痛付れば官軍の隊長品川土方等烈しく士卒に下知して刀槍をもて之に當り或ひは六竅砲を発し大塚等数十名を遂に殪るに及びて什麼らの六竅砲といへば英語に「カットリングコン」と唱へ彼の野戦砲の如き車臺に架したる六竅の砲にして筒の元に鎗りあり廻りに隨ひて弾丸を発すること一分時間に百八十発を為すといへ此に田天の船将甲賀源吾は自ら甲板のうへに出て兵士等を指揮して五十六斤の大砲を矢庭に敵船へ放さるるぞ其弾丸忽ちに甲



鉄艦の甲板を貫き蒸気室に至れるを以て官兵死する者数十名砲聲大雷の落るが如く山嶽も崩るる勢ひなり是に於て官兵等はいよいよ憤怒の色と顕はし甲鉄その餘の軍艦よりも齊しく小銃を発し

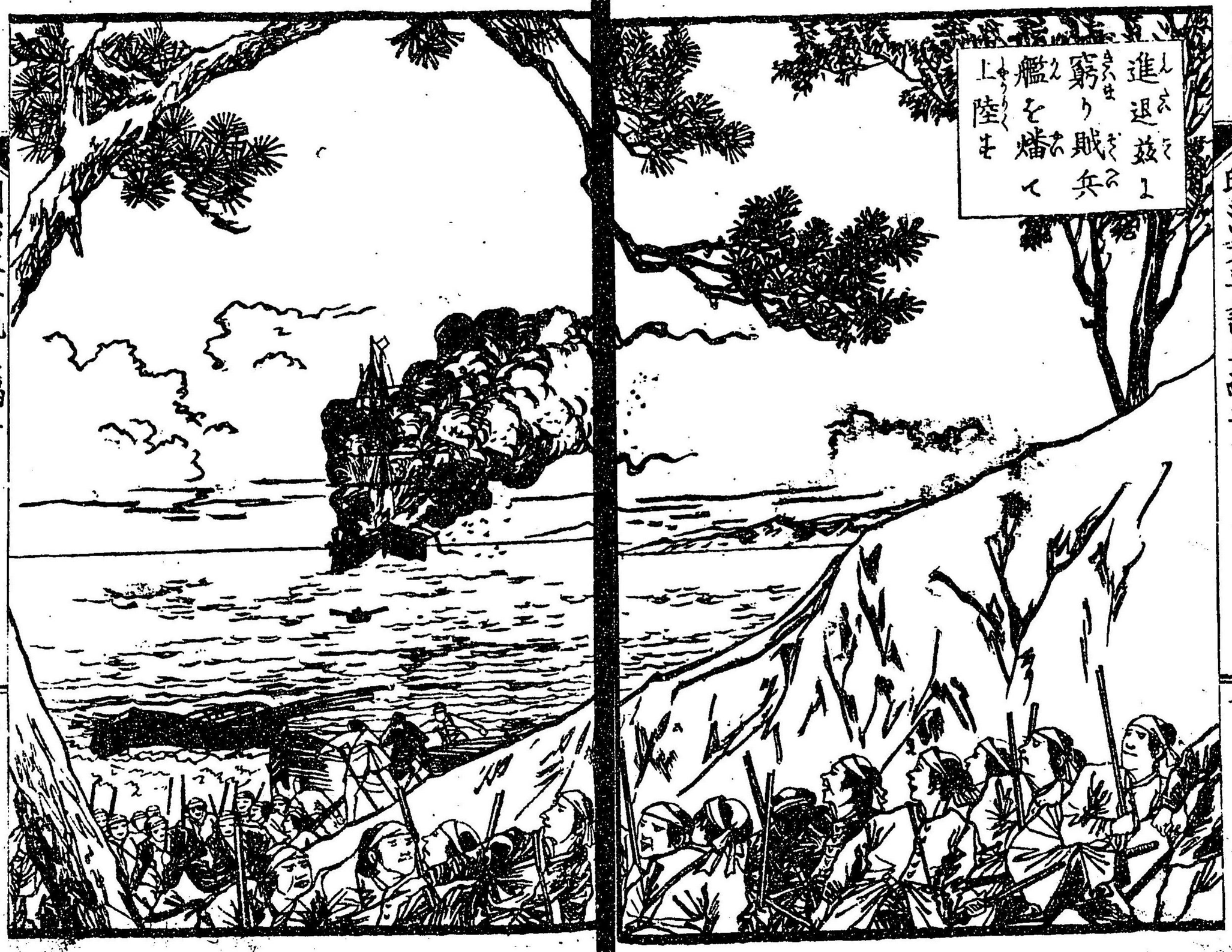
甲賀を狙撃する程に一を左りの股に中り一を右の腕を貫けども甲賀は尚も屈する躰なく頻りに衆を激まして是非に件の甲鉄艦を打沈めんと圖るゆゑ官軍も又奮激して例の六竅砲を以て頻りに打まくめし

べ遁が不敵の甲賀源吾も数々所の重痍を蒙りく遂に命を落せしべ賊徒等大いに力を失ひ砲撃始めの如くなるも此時提督荒井郁之助ハ熟々戦ひの体を見るに我に不意に起りしが故に敵船何れも狼狽して射方勢ひを得たるに似たれども蟠竜高雄も来らず外に援る船なければ迚も必勝の戦ひなるべ幸いに我が一艦にて敵の七艦に当りるべく聊か船に損傷なく徐ろに退くふ如くにて忽ち今しく其船を沖の方へと乗走ちれば官船ハ夫と見て急に追ひ掛たりしが間遠なる故遂に及ばず物別れとなりしこの役や僅に三十分の時間なれど官軍の死傷百余人賊軍の死傷も五十名余に及ぶとの事ハ頗る烈戦なりと知るべし凡海軍他邦の旗章を揚げ港内に進み発砲するも自国の旗章を揚ると海軍律の許す所なべ賊兵とも

に倣ふと言ふ而して初め甲天丸の此港に進めるや官艦

港中に在りて碇泊の位置法律に背けば賊船をして
忽ちに巨舸甲鉄を衝かしむるに及べるもいまだ又
蟠竜艦を颶風の為に進むを得ずして海上に漂泊
せしに風波少しく鎮りたれば豫て南部領鮫浦に會し吏
員宮古港に攻入るの議を決せんと約せし吏員少しく
其期に後るゝと雖も約定の地に至らんとして鮫浦
に赴きたるに浦内寂寥たる一艦の泊するもなく
わづかに忽ち其浦を去りて測らざるも洋中にて田天
丸が宮古より走帰るに出會ふて始めて苦戦の形
状を听き其戦ひを援け得ざるを遺憾に思へど詮術なく
其侭楫を轉じて共に函館へ走去り斯くまで高雄
艦に風波の難を凌ぐに蒸気の器械を損ぜし
ば自由に運轉する支かるに風に任せて流れる程
に南部の地尾元村に左右して漂着せしが這所は
宮古に遠く絲べ田天丸を追ふて官船にやく
されを見付け賊艦ありと知るや襲ひくるを

擊んとまるみぞ高雄の船將古川節蔵等防戰做さん
と思へども船の進退自由ならねば又奈何とも為べき
やうなく術計尽て艦に火を掛け從兵七十余人の面々
哨船に乗りて上陸せしが何地も敵の中なるゆゑ又函
館へ帰るの道なく盛岡藩より降るとぞ尓程に官軍
ハ頻りに船を急がせく彼高雄艦に近より見れバ艦
中已に火ありて賊一人も在らざれバ是において官艦
七隻相議しく約をなし共に青森に至るみぞ去年以来
此地に在りて日々援兵の来るを俟暮しなる官兵
等い轍鮒の水を得たるが如く何とも勇み立ざるい
なく此上ハ賊地を襲ひて去年の恥辱を雪ぐんと准備
専らなる程に又脱兵の方にて、田天蟠竜両艦ぐ走せ
皈りて云々と事のやうを報知るゆゑ徒らに不日官
軍の攻来らんと必せりとて田天蟠竜千代田形の三艘の
軍艦をしく日夜函館の港内を巡警し以て不慮の
備へとなし更に函館在留の外國人に事を告て此港を


進退茲に窮り賊兵艦を燔て上陸せ

避さしむ因て外國の面々ハ各々自艦よりち乗て何れも此地を退けバ又市民等よ過ちあるまきゆうあれと郊外よ立去らせ兵火消防の為よとく水桶の類ひまを街々よ備へ置き備まき陸軍の兵を令けて五稜郭よ八百人函館よ三百人松前よ四百人江刺よ二百五十人福島よ百五十人其餘「モロラン」森砂原川汲等の地ゆも一二小隊宛を置きて官軍の至る所候てり却て四月八日ろハ官艦七艘青森を発し九日の黎明よ江刺の近海を乗通り乙部村よ著くや否や陸兵直ちよ上陸して山よ登りて要衝よ據り始め賊軍の方よて官艦かのうぜ函館ら江刺よ向ひ来るしと手よ嗤しく待たりしよ思ひ設けぬ所より船を向けると注進ゆるゆ大いよ手筈ハ違ひしらど賊の隊長三木郡司等三小隊を率へて敵の上陸せざる所を先だちて之を討んと田沢村とよ所まを兵紙廻しく来りしよ官軍ハ山上よ在りて俯して

ある後砲擊なせば浦邊より寄りし諸艦よりも岸上なる賊兵を狙擊まる支甚しき史賊兵遂に支ゆるを能はざる是非なく其場を退きて土塲河と云ふ川を隔て防戰に及びし是時官艦五艘を江刺浦に乘入く頻りに大砲を連發なせば賊軍の方にては這回新築の砲臺より砲を發ぜられに應じ須臾ハ接戰に及びしかど俄かの支にて其砲臺ハいまだ落成せざる史壁毎に砲を備へざ防禦心の伜なり終に其利なきを度り砲臺を打棄てて二股の方へとて兵を引んと為たるとき彼の土塲河の賊兵も嚴しく官軍に逼られて開処をも支ゆる支悉く稍敗走に及びしかど徒らに防戰成りがたしとて二手の賊兵本道なる松前に走りしかば官軍江刺を恢復せり尓程に賊兵等ハ勢ひ防ぎ匝きが故に一旦松前に退きたれど何れも憤怒に堪へやらざ再び江刺を取返さんと伊庭八郎松岡四郎等兵士凡五百餘人大砲二門を率せて既に江刺に向

んとせしに官軍も又松前を攻んと兵を二手に分ち一
て則ち江刺口より一ハ鵜村口より漸次に進んで根部
田村に至るべ伊庭松岡等の脱兵が進み来るに出會ふ
たり因て両軍兵を交へて接戦に及んとするに賊
徒等兵士を山谷に散らし樹木の間に出没して或ひハ
刀槍を以て横さまに中隊を衝き或ハ砲玉を放ちて前
隊を撃つ神速変化窮まりなけれバ遂に官軍大いに
乱れ兵器を棄て敗走るを追ふて江良町に至り
たり此役や官兵の殪る者甚だ多く大砲三門小銃
数十挺及び刀槍弾薬の類ひ若干賊手に掠奪せら
れぬ偖此月の十二日薩長の兵数十名暁霧に乗じて
潛やかに木古内なる賊営を襲ひその胸壁に近づく
是僅か十四五間に至り齊しく砲を放つ胸壁
殆んど毀れんとせり此時賊の本営より大鳥圭介
本多幸七郎等大いに兵を引率して木古内に馳
来り則ち兵を山谷に伏せ官軍を挾み撃ちに官

賊徒等林間より兵を散じて大いに官軍を惱ます

兵苦戰に及ぶとりゝども前後より敵を引受て進む
も引くも自由を得ず傍の樹林に逃入りて敵の筒
先を避んとせる賊徒等得たりと急に擊て大
いに之を悩ませり此日官軍の別隊なる薩長備後福山
等の兵六百餘りの人數にて二股口の賊を襲ふ脱將
土方歳三等一大隊にあるに當り胸壁十六ヶ所より
しきり大砲を乱発し順次に新手を入替て砲戰に及
ぶ程に日ハ晩たれども尚止めず翌十三日の午前七
時に至り官兵進擊せる支を得ず遂に兵を引しぞ
是に於て漸く止めり此戰ひの始まりより砲声の止
ざること既に十六時の間なれバ其砲を放つ支三万五千余
發とゝ此日また仙臺の脱士四百余人共船にて乘て
賊徒に来り加はるに依り賊勢いよゝ振ひてぞ備十
六日松前の脱徒等木古内二股両所に於て防方勝
利を得しと聞くより此勢ひを拔ずして江刺に逼りて取
返さんと大挙して兵を発し既に前隊ハ速くも進む

江良町ゟ至りしに官軍則ち春日艦と謀略を合せて海陸より賊兵を挾撃ゟせ一程ゟ賊将堀角之助以下の面々大いふ苦戦ゟ及びしゟど勢ひ遂ゟ窮まりて是等ハ多く打死しの残兵ハ辛くして松前ゟ逃飯より官軍ゟの機ゟ乗じて次の日の黎明ゟ甲鉄以下の五艦を率ひ海陸の兵並び進んで松前の城ゟ逼るふぞ賊徒ハ昨日の敗蹟ゟ大いふ士卒を失ひしれど尚も屈まる氣色も見へず急ゟ残兵を分署して本道折戸の砲臺ゟ據り敵の陸兵を狙撃まるみぞ死傷の者も多くして既ゟ敗走ゟんとまる支稍三回ゟ及びし然踏まるて居る折ふ別ゟ一手の官軍の山手の方より向ひしの賊の別軍と戰ふて賊徒等然追走らせ遂ゟ折戸の裏道ゟ至るふ今本道ふて官軍の戰ひ危きより然吹きまるを援けて裏手より彼の砲臺ゟ襲撃せしに賊兵前後ゟ敵を受くまる又奈何ともまる支能ふ杉山敬次郎をして

松岡が信義敵中より朋友の首級を収む

とゝも名たゝる脱士等數十名茲に至りて打ち斃され其餘は堪へず敗散せーゞ升ゞ中に松岡四郎等僅に八名踏止まり尚胸壁を成り居るゞ是まで敵ーがたを知りて遂に胸壁をうち乗て脱出去らんと為たる時彼の八名の其うちに岡田某と言へる者敵の放てる流丸に中り途中に於て殪まーうべ松岡は捨置くに忍びず屍を取帰らんとすれども其暇もなうざる少腰なる短刀引抜きて首搔砍りー紙携へて辛く其場を去りぬ此時甲鉄以下の軍艦も已に松前の海岸に乗り付け齊しく砲発に及ぶ程に賊兵もされに應じて城内及び砲臺より撃戦する事數刻に及び終に賊軍の方にゝを弾薬已に尽たれば防ぐべき術なふ薄暮に至りて兵を纏め海岸の捷路より福島の方へ落行くを官艦春日丸おを追ふて頻りに砲を打撃しゝど間遠なる故弾丸の一も賊徒に中らぜ

と言ふ恁く賊兵退去為たれバ是より至りて松前の城も此日官軍乗取まつ余バまさ賊徒等を戦ひ利りなるに依り松前を退きて福島に至りしに此地に百餘人の兵を留め知内木古内の兵士等と応援を做さしめて官軍の押へとして其餘の兵ハ總て五稜郭に退きしは十九日の拂曉に官軍狹霧の中に紛れ枚を啣て進みて木古内の賊營に不意に襲撃為たりし処賊徒ハいまだ臥房を出ぬ由断なるを

折から故寂耳に敵の砲声を聞くより大いに狼狽して食を蹴ひるがへして起出しが爭でか支ゆる支を得ん且戦ひ且走りて札苅の海岸まで漸ふ〳〵退きしふ官軍破竹の勢ひに乗じ追ふ急なれバ賊兵ハ札苅を乗て泉驛に走りし時ハ已に正午の頃なりしが折から知内に屯せし賊軍の一隊ハ躬方難義と聞くも卒ふ兵を出して官軍の後ろを襲へバ泉駅なる脱兵等も為に勢ひを得て兵を還して戦

へば是より至りて官軍も專ら奮勇を尽さとりて數刻の間の爭戰より倦労をする上を後ろより新手の敵兵起り前なる賊徒も始めより似ぎ備へを固めて擊て蒐れば終に堪へぎ乱れ立て脱道より〳〵敗走るをみて賊軍ハ又木古内を取返せ支を得たりとぞ

明治太平記五編巻之一終